

高野辰之の「唱歌」と北原白秋、西條八十の「童謡」について 本人の私観と歌詞分析からの考察

Shoka" by Tatsuyuki Takano and "Doyo" by Hakushu Kitahara and Yaso Saijo
Consideration from his personal view and analysis of the lyrics

飯泉祐美子(帝京科学大学)

Yumiko IIZUMI(Teikyo University of Science)

(要旨)

本研究は、およそ100年間歌い継がれている「唱歌」と現在は耳にすることは少なくなった「歌う童謡」を、現在残されている資料をもとに、その違いを探るための研究の一端として分析を試みたものである。

本論では特に、高野、北原、西條らの「歌」の「詩」に込めた思いを綴った本人らの書き残した私観や、「歌詞」に関する文献に着目し、また、井口(1993)の歌詞分析カテゴリーを指標として考察を試みた。三者はいずれも詩に対する思いや音楽に対する思いがあり、井口の指標による分析では、三者には共通点と相違点があることが明らかとなったが、当時の子どもにとって、それらの差異を感じさせるほどではなかったのではないかと結論に至った。

(キーワード)

学校唱歌、赤い鳥童謡、子どものうた、歌詞分析

1. 課題提起

1918年に鈴木三重吉が、「世間の小さき人のために、芸術として真価ある純麗な童話と童謡を創作する、最初の運動を起こしたい」と思い、月刊雑誌『赤い鳥』を主宰刊行することにしました」と『赤い鳥』の創刊への趣旨を文書にして配布している。

これは、1910年『尋常小学読本唱歌』及び翌1911年の『尋常小学唱歌』に対する批判と満たされない思いを持っていたことが予想される。

しかし、これら『尋常小学読本唱歌』『尋常小学唱歌』など「学校唱歌」は、100年以上たった現在、一部ではあるが、日本人の心の歌として歌い継がれている。反面『赤い鳥』の「歌う童謡」は、ほぼ歌われておらず、「学校唱歌」に対する対立軸となっていないと考えられる。

これは、学校教育現場における音楽科教育の成果といえるが、それだけの理由で日本人の心の歌として歌い継がれるだろうか。100年

以上歌い継がれるとは、それ自体に魅力があるが故の成果であろう。

では、その魅力とは何であるのか。

「歌」は、「音」と「詩」の両者によって成立するものである。歌い継ぐには、「音」や「メロディのよさ」だけでは難しかったと思われるが、「詩」の魅力によって、作詞者の思いをつづることで、歌い継がれる要因になったと考えられる。

本研究では、現在も小学校音楽科歌唱共通教材として歌い継がれている『尋常小学読本唱歌』及び『尋常小学唱歌』に掲載された6曲の唱歌の作詞者高野辰之と、それを批判した鈴木三重吉より『赤い鳥』の「歌う童謡」を託された北原白秋、西條八十の「歌」の「詩」に込めた思いを、本人らの私観から読み取り、更に歌詞分析によって考察を試みる。

本研究で取り上げる「唱歌」や「童謡」は、これまでのおよそ100年にわたり、時代に奔走されながらも歌い継がれ、音楽分野の

文化遺産を築いたものである。この音楽文化遺産を恒久的に継承するために、本研究が一助となることを目指す。

2. 先行研究

本研究の先行研究として、「童謡」と「唱歌」に代わる教材になりえたかどうかを検証した研究として石田（2008）がある。

石田は、童謡が唱歌に代わる教材になりえたかどうかを検証した。

その結果、当時の「童謡」は、「童心性」「伝統性」「芸術性」を拠りどころとしており、それらは「唱歌」と比べると大変優れていた。しかし、反面、作曲家の伝統音楽への認識の希薄さや、作曲技法上の問題から、

「童謡」は「唱歌」と音楽の構成要素としては相違はなく明確な対立軸にはなりえなかったと述べている。

そして、「童謡」が、芸術性を追及すれば、音楽形式や音楽が子どもにとって難しいものとなり、唱歌に代わる、子どもにふさわしい教材にはなりえない矛盾を抱えていたとも述べている。

3. 本研究の位置づけ

石田（2008）は、音楽的側面からの見解のみである。音楽に関わらない部分、すなわち、歌詞に関わる内容分析まで言及していない。

本研究は「歌詞」に着目し、その分析をもとに論を進める。

4. 本研究における言葉の定義

「子どものための歌」とは、一般的に「子どもの歌」「童謡」「わらべうた」と呼称するが、本研究では、図1のように明治以前の近世後期江戸時代の子どものための歌を「わらべうた」、1872年学制発布以降、主に学校

で取り扱われたものを「学校唱歌」、1918年「赤い鳥童謡運動」によって生まれた学校外の子どもの歌を「童謡」と定義する。

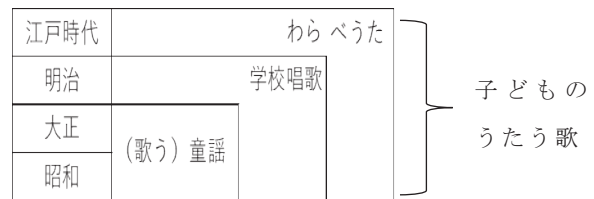


図1 本研究における言葉の定義

5. 本研究における「子どものための歌」の時代的な位置づけ

(1) 近世

近世の子どもの歌である「わらべうた」は、唱えながら伝承され成立したものである。そのため、歌詞もメロディも微妙に異なる完成形がいくつも存在するのは周知のことである。江戸時代の子どもたちにとっての歌う環境は、誰かから習って歌うというよりは、遊びながら、唱えながら、自然発生的に歌われるものであったと窺える。

(2) 近代

<明治初頭>

1872年学制発布により、学校で「唱歌」を教授することが掲げられ、「子どものための歌」は、教授される歌として位置づけられた。しかし、それまでのわが国の「子どものための歌」は、大半が口承伝承であったため、子どもたちが、学校で歌い学ぶことのできる歌や、その教授法は存在しなかった。そのため、「当分之ヲ欠ク」と、但し書きが添えられ、実際には取り扱われなかった。1878年宮内庁式部寮雅楽課によってつくられた「保育唱歌」が、初めて「子どものための歌」として教授するために作られたものである。

この時代は、どのようなものが「子どものための歌」としてふさわしくその役目を果たす

ことができるのか、模索している状況であったこともあり、せっかく作られたが大変な不評であった。

その後、1875年、愛知の師範学校の校長であった伊澤修二が、教育を学ぶために渡米し、ルーサー・ホワイティング・メーソンの下で音楽を学んだ。このことが大きなきっかけとなり、その伊澤と在米留学生監督官の目賀田種太郎が、「音楽教育の必要性」を進言するに至った。これは「唱歌」にとって大きな前進となった。その後、帰国し、1879年に伊澤は音楽取調掛として御用掛を任命され、翌年のルーサー・ホワイティング・メーソンの来日とともに、子どもに与え教授するための「子どものための歌」である「学校唱歌」の創作と普及に努めることとなった。

この時期の「子どものための歌」は、歌詞の内容や音楽の醸し出す雰囲気は日本の民族感情に合うものを意識しており、メーソンが提出したスコットランド民謡やアイルランド民謡などのペンタトニック手法の外国の民謡は、日本人にとって歌いやすいものであったため、これらに、日本の精神を読み込んだ歌詞をつけた折衷の歌が多かった。

しかし、これらは、日本の伝統的な音楽やその音楽に対する民族性は切り捨てられたものであった。そして、歌詞は「徳性の涵養」を目指し、「知育」「徳育」「花鳥風月」に徹し、「文語体」を用いたものであった。

これは当然、「日本伝統音楽」ではない、しかし、「西洋の音楽」そのままのものでもない、外国の曲や外国風の曲に歌詞をつけた「唱歌」の誕生であった。

＜教科書とともに誕生した学校唱歌＞

1910年文部省は、尋常小学校初の唱歌教科書『尋常小学読本唱歌』を編集した。これは、当時の国語読本『尋常小学読本』の韻文教材より27首を選び、曲をつけたものであ

り、東京音楽学校に依頼し、その教授らを中心に構成された編纂委員が合議して作曲したものである。そのため、曲の作詞者、作曲者は伏せられ、著作権は文部省が所有することになった。翌1911年の『尋常小学唱歌（第一学年用～第六学年用）』は歌詞に曲をつけた「唱歌」として成立した最初のものである。この『尋常小学読本唱歌』、『尋常小学唱歌（第一学年用～第六学年用）』は、100年以上たった現在でも、小学校音楽科歌唱共通教材として、全24曲の歌唱共通教材中、13曲が存在し、歌い継がれているものである。このうち6曲は高野辰之が編纂委員として、趣旨に沿いつつ、子どものために詩をつくり、岡野貞一が編纂委員として趣旨に添いつつ、曲をつけたものである。両者によるコンビの作品として「日のまる」「春がきた」「春の小川」「もみじ」「朧月夜」「故郷」は今なお色褪せることなく歌い継がれている「学校唱歌」である。

この後も、『高等小学唱歌』（1930年）『新訂尋常小学唱歌』（1932年）『新訂高等小学唱歌（男子用・女子用）（第一学年用～第三学年用）』（1935年）『ウタノホン上、下』（国民学校初等科1、2年生）（1941年）『初等科音楽一～四』（国民学校初等科3～6年生）（1942年から1943年まで）『高等科音楽一（男子用・女子用）』（1944年）と、「唱歌」の歴史は、太平洋戦争が終戦を迎えるころまで続く。

＜赤い鳥＞

鈴木三重吉は、「芸術として真価ある純麗な童話と童謡を創作する最初の運動を起こしたい」と、童話と童謡の2本立ての企画による『赤い鳥』を創刊した。

この詩作と選者として鈴木は、当初北原白秋と三木露風に依頼した。しかし、三木に断られ、灰野正平を介し、西條八十に依頼した。

この『赤い鳥』は、「子ども」を意識して作った「子どものための歌」である、「童謡」である。

〈本研究の対象〉

本研究の対象は、先述した「学校唱歌」作詞者の高野辰之と『赤い鳥』掲載の「童謡」作詞者の北原白秋、西條八十の私観とその歌詞が対象となる。

6. 唱歌観・童謡観とその音楽観

(1) 高野辰之

高野は、私観として、唱歌及びその音楽に対しての自らの思いを言葉でつづっている。

〈唱歌観〉

凡そ学校の教科書程自由を拘束されるものはない。唱歌にしても、文字文體よりはじめて、修身歴史地理理科などの他のあらゆる學科と阻隔させてはならぬのであって、まさに詩であるべき唱歌に、教訓とか知識とかの、第二第三の目的が含まれてゐるのである。自由と開放を希う詩人がどうしてこれに満足しよう

〈音楽観〉

在来の童謡は必ず謡うものであった。そうして作歌と作曲を分離できないのが本義であった。然るに新しく作られた童謡は歌と曲とはおむね別人によって作られ、歌だけ出て、曲のついていないのが澤山ある。

これは、高野が、「学校唱歌」による「徳性の涵養」を嫌っていたことがわかる一文である。高野は、五感で感じた心の内を描く詩人であり、唱歌で歌われた詩は、高野の本望とはいえぬ、内容を制限され創作された詩であったことが窺える。

更に、その曲に対しても、詩の情感に対する楽曲創作の難しさ、楽曲創作側の詩の情感に対

する無関心さなど、不満を示していたと思われる。

高野は、本来、「学校唱歌」の歌詞と曲は、切り離しえないものと考えていたことがわかる。

高野は、「子どものための歌」は一人の人間が作詞と同時に作曲者であるかのように「寸隙のくい違いもない」ものでなければならぬと考えたのである。

(2) 北原白秋

北原は、私観として、唱歌及びその音楽に対しての自らの思いを次の言葉でつづっている。

〈童謡観〉

新しい日本の童謡^{わらべうた}は、根本を在来の日本の童謡に置く。日本風土、伝統、童心を忘れた小学唱歌との相違はここにある。

〈音楽観〉

どうしても童謡は作曲しないで、子供達の自然な歌い方にまかせてしまった方がむしろ、本当ではないかとも思われます。

北原は、近世のわらべ歌のように、子ども達が唱えながら歌うことが、本当の「子どものための歌」だと考えていたことがわかる。

日本の風景や日本人の本能的に身についている感性と、そのもとで育った子どもの心の内から発生するものが、「子どものための歌」だと考えている。

(3) 西條八十

西條は、私観として、唱歌及びその音楽に対しての自らの思いを次の言葉でつづっている。

〈童謡観〉

それが多少難解なものであっても、詩人のほんたうの霊の響きをもつた作品は、ちやうど偉大な作曲家の手になる音楽が無智の民衆を自然に感動させるやうに、おぼろげにも児童たち

の純真な霊に呼びかけて、かれらを崇める作用を務めるであります。

〈音楽観〉

いい伴奏だけを弾いていただいて、それを聞きながら、歌詞を見ていて下すったら、私の童謡の感じは本当に出はしないかと、ふと私の空想でそんなことをおもいました。

西條は、多少内容の理解の難しい詩であっても、子どもたちには、その詩人の思いが伝わるものだと考えている。子どもだからと言って簡易にするのではなく、純真な心を持っているからこそ、子どもには質の伴った詩を提供し、たとえ内容のすべてを理解できなかったとしても、その持つ感性などを感じ取ることができると考えている。そのようにして、子どもたちは、よきものを感じることから、良いものを理解できるようになると考えている。

音楽について西條は、どんなに良い音による表現であったとしても、自分の思いをつづった詩とはミスマッチであると感じている。作曲された音楽によって詩が表現したかった世界と実際に音楽の伴った詩ではその世界観のずれが生じていると感じている。

(4) まとめ

高野、北原、西條の三者は「詩」に対してはそれぞれの「詩」に対する思いが前面に掲げられているため、それぞれが言っていることは、少しずつ異なっている。しかし、それらの「詩」にともなう「音楽」に対しては、いずれも「詩」を創作するものと、「音楽」を創作するものと感性のずれを実感し、述べている点は共通である。

7. 高野辰之の「唱歌」と北原白秋、西條八十の「童謡」についての歌詞分析

前述の三者が述べていることは相違点もある。

れば共通点もある。

なぜ、これら「学校唱歌」が100年以上たった現在、一部ではあるが、日本人の心の歌として歌い継がれている反面、『赤い鳥』の「歌う童謡」は、あまり耳にすることのない、ほぼ歌われない状態になったのか。

そこには相違などの何か要因はあるのではないかと考え、三者の歌詞分析を試みる。

(1) 分析対象

歌詞の分析の対象は、「学校唱歌」として現在でも歌い継がれている小学校音楽科歌唱共通教材の高野辰之作詞の6曲と、「歌う童謡」として『赤い鳥』の楽譜付き童謡のうち、初出から1922年西條八十の掲載が終了するまでの期間の北原白秋作詞の29曲、西條八十作詞の16曲の計51曲とする。その分析方法は、井口(1992)の「幼児歌唱教材の歌詞の特徴の数量化による分析カテゴリー」を、一部修正して行った。

現段階では、その傾向を知るための表を作成した。また、分析カテゴリーの分布傾向を知るためにレーダー図を作成した。表の分析のカテゴリーの項目は次に示す通りである。

(2) 分析のカテゴリー

A. オノマトペ

(擬声語、擬態語、掛け声、無意味語)

B. 同語の繰り返し(さいた さいた、エコー)

C. 頭韻による語呂のよさ

D. 脚韻による語呂のよさ

E. 色の変化や数え歌のような順序性が詩のテーマになっているもの

(あか しろ きいろ、数字の歌、ドレミ等)

F. 歌詞のほとんどの部分に定型詩のリズムをもつもの

G. 動物や花、キャラクターなどがキーワードとして興味や親しみに結びつくもの

H. 特定の行事や季節感と結びつくもの

I. 対話的な内容を持つもの

(おかあさん、なーに：お鼻が長いのね)

J. 一定のストーリーや、情景を描いているもの

(あめふりくまのこ：南の島のハメハメハ大王)

(3) 分析表

分析表を作成した。分析カテゴリーの都合上、A～D で一つの表とし、E～J を一つの表とした。

表1 高野辰之の唱歌歌詞分析表 その1

分析カテゴリーA～D

高野辰之			A	B	C	D
整理番号	発行年	曲目				
1	1911	日のまる	ああ			にほんのはたは
2	1910	春がきた		春がきた 春がきた・花が 咲く・花が 咲く・鳥 が鳴く・鳥 がなく	山に・里 に	きた・さ く・なく
3	1912	春の小川	さらさら		春の小川 はさらさ らいくよ	ささやき ながら
4	1911	もみじ				
5	1914	おぼろ月 夜				
6	1914	ふるさと				ふるさと

表2 高野辰之の唱歌歌詞分析表 その2

分析カテゴリーE～J

高野辰之 整理番号	E	F	G	H	I	J
1		○	日のまる			日のまる について
2		○	春・花・ 鳥	春・花・ 鳥	春の事象 について 問いかけ	初春の情 景
3		○	小川・ 蓮華・え び・メダ カ・こぶ な	スマレ・ 蓮華・メ ダカ	春の事象 について 対話	春の情景
4		○	もみじ・ マツ・ 楓・つた	もみじ・ 楓・つた		紅葉して いる情景
5		○	菜の花・ おぼろ月	おぼろ 月・菜の 花・春 風・夕 月・かわ ず		春の夜の 情景
6		○	ふるさと			ふるさと の回想

表3 北原白秋の童謡歌詞分析表 その1

分析カテゴリーA～D 整理番号1～9まで

北原白秋					A	B	C	D
整理番号	発行年	月	巻	号	曲目			
1	1919	6	2	6	雨		雨が降り ます雨が 降る	
2	1919	6	2	6	あわて床 屋 チョッキ ンチョッ キン チョッキ ンナ			
3	1919	8	3	2	山のあな たを		やまのあ なた	
4	1919	9	3	3	りすりす 小栗鼠	ちよろ ちよろ	りすり す・ちよ ろちよろ	りすりす こりす
5	1919	10	3	4	犬のお芝 居	ちゃぼん ぼん・こ ひよこ・ ざろざろ ・へら・ ちんがち りちり	ちゃつぽ んぽん ちゃつぽ んぽん	ちゃつぽ んぽん ちゃつぽ んぽん
6	1919	10	3	4	井戸掘り	えんやら さのどっ こいさ	掘れ掘 れ・つけ つけ・湧 け・湧け ・立て・ 汲め・炊 け炊け	えんやら さのどっ こいさ
7	1919	12	3	6	お人形焼 く家	あれあれ ・いえ いえ		お人形焼 く家
8	1919	12	3	6	舌切雀	とんとん からりこ とんから り・お土 産はお土 産は・ど こかいな どこかい な	どこへ行 たどこへ 行た・と んからり とんから り・お土 産はお土 産は・ど こかいな どこかい な	
9	1920	1	4	1	団栗	どんぐり こっこん ぶりこ ・どん ぶりこ	どんぐり こっこん ぶりこ ・どん ぶりこ	どんぐり こっこん ぶりこ ・どん ぶりこ

表4 北原白秋の童謡歌詞分析表 その2

分析カテゴリーE～J 整理番号1～9まで

北原白秋 整理番号	E	F	G	H	I	J
1		○	雨			雨の日の 情景
2		○	蟹・兎		蟹の床屋 のお話	蟹の床屋 のお話
3		○	山・母			昔を回想
4	赤いぞ・ 青いぞ・ 白いぞ	○	りす		りすに対 する対話	栗鼠の様 子
5		○	子犬・子 熊・猿			犬のお芝 居の様子 井戸掘り の様子
6		○				お人形を 焼く家の 様子
7		○				舌切り雀 のお話
8		○				団栗の様 子
9		○				

表5 北原白秋の童謡歌詞分析表 その3

分析カテゴリーA～D 整理番号 10～22 まで

北原白秋					A	B	C	D
整理番号	発行年	月	巻	号	曲目			
10	1920	3	4	3	鷺の小屋	ガアガ ア・ちら ちら	鷺の小屋	
11	1920	3	4	3	ねんねの お鳩	ねんねん ほろろん ねんほろ よ・ほろ ほろ・	ふるふる	
12	1920	4	4	4	雪のふる 夜		大雪小 雪・雪降 る・誰か ひとり	
13	1920	4	4	4	赤い鳥小 鳥	なぜなぜ	なぜなぜ	実を食べ た
14	1920	5	4	5	月夜の家		壊れたピ アノに壊 れ椅子	ばかり
15	1920	11	5	5	真夜中	コツツ コツツコ ツツ・ぞ ろぞろ	小盲目、 盲目	コツツ コツツコ ツツ
16	1920	12	5	6	葉っぱ		葉っぱば 葉っぱ 葉っぱ	それでも 葉っぱは 葉っぱば 葉っぱ
17	1921	2	6	2	金魚	まだま だ・なぜ なぜ	かあさん かあさん	
18	1921	3	6	3	ちんちん 千鳥	ちんちん	まだ寒い まだ寒 い・啼く 声は啼く 声は・親 ないか親 ないか・ お寝らぬ かお寝ら ぬか	ちんちん 千鳥
19	1921	4	6	4	夢の小園		かわいい	
20	1921	5	6	5	仔馬の道 ぐさ	とつと		とつとと 走れ
21	1921	7	7	1	離れ小鳥		離れ小鳥 の椰子の 木は	
22	1921	8	7	2	こんこん 小山の	こんこん	こんこん	まだ小さい

表6 北原白秋の童謡歌詞分析表 その4

分析カテゴリーE～J 整理番号 10～22 まで

北原白秋	E	F	G	H	I	J
整理番号						
10		○	鷺			鷺の小屋 の夕刻の 様子
11		○				子守歌
12		○	雪	雪		雪夜の様 子
13	赤い鳥、 白い鳥、 青い鳥	○	小鳥		小鳥と対 話	小鳥の様 子
14			月夜			月夜の家の 様子
15		○				夜中の様 子
16		○	葉っぱ			葉っぱの様 子
17		○	金魚		母との対 話	さみしい 思い
18		○	千鳥		千鳥に對 しての問 いかけ	千鳥の様 子
19		○	月夜・イン コ・ネズミ のお化け・		夢の小箱 を欲しい 子との対 話	夢の小箱 のもらい 方
20		○	仔馬		仔馬に對 しての対 話	仔馬の様 子
21		○	椰子の気		椰子の木 に對して の対話	椰子の木 の様子
22	1日2日・ 一飛び・ 二飛び・ 一粒二粒	○	お月様・ 仔馬・			連想して いる様子

表7 北原白秋の童謡歌詞分析表 その5

分析カテゴリーA～D 整理番号 23～29 まで

北原白秋					A	B	C	D
整理番号	発行年	月	巻	号	曲目			
23	1921	8	7	2	げんげの 畑に	きらきら ・いや いや		
24	1921	9	7	3	南の風の	つつい ・とろ り	南風の吹 く頃は	
25	1921	11	7	5	涼風、小 風	ちらちら ・いえ いえ		
26	1921	11	7	5	ちんころ 兵隊	ちんころ ちんころ ちりちり ちん・そ れそれ・ いやいや	ちんころ ちんころ ちりちり ちんちん ちんちん ころちん ころちり ちりちん	
27	1921	12	7	6	雀のお宿	こんも り・とん から・ち らちら・ ちりぢり	雀のお宿 は	
28	1922	1	8	2	三百屋	ごろりよ		
29	1922	2	8	2	吹雪の晩	ちらちら ・そは そは・あ れあれ・ いえいえ		です・ま す

表8 北原白秋の童謡歌詞分析表 その6

分析カテゴリーE～J 整理番号 23～29 まで

北原白秋	E	F	G	H	I	J
整理番号						
23		○	雀			雀の様子
24		○	失楽の花	失楽の花		南風の吹 くころの 様子
25		○	駒鳥			駒鳥の巣 の様子
26		○	兵隊			兵隊の様 子
27		○	雀			雀の住処 の様子
28		○				トムミイ ツロット さんの様 子
29		○	吹雪・夜 鳴・風・ 鈴・そ り・	吹雪・そ り		吹雪の晩 の様子

表9 西條八十の童謡歌詞分析表 その1

分析カテゴリーA～D

西條八十					A	B	C	D
整理番号	発行年	月	巻	号				
1	1919	5	2	5	かなりや		唄を忘れた金糸雀は	ましよか
2	1919	11	3	5	あしのうら	によきり		
3	1920	1	4	1	芒		芒	海を聴く
4	1920	2	4	2	山の母		いつも	山の上
5	1920	4	4	4	春の日		行ったり来たり	お室の時計錆びた振り子
6	1920	7	5	1	鳥の手紙			
7	1920	8	5	2	玩具の舟			
8	1920	8	5	2	象と芥子人形			
9	1920	9	5	3	お山の大將		お山の大將・あとからくるもの	
10	1920	10	5	4	電信柱の帽子			
11	1920	11	5	5	花火	ぼらりぼろり	花火花火	
12	1921	1	6	1	犬と雲			
13	1921	6	6	6	風		誰か風を見たでせう	見やしない・風は通りぬけてゆく
14	1921	10	7	4	たんぽぽ	ふはり	ふはりふはり	
15	1922	1	8	1	人形	おおしくしく	鐘はそろって・鳥はそろって	～人形の・～とき
16	1919	3	8	3	薔薇		船のなか	

表10 西條八十の童謡歌詞分析表 その2

分析カテゴリーE～J

西條八十		E	F	G	H	I	J
整理番号							
1			○	金糸雀		金糸雀についての相談	相談の様子
2			○	赤いカンナ			空想
3			○	芒・海			芒の様子
4			○				山の上にいる母の様子
5			○	雲	春・花の祭り		行ったり来たりの様子
6			○	鳥			夢
7			○	玩具の舟			空想
8			○	象・芥子人形			象と芥子人形の様子
9			○	お山の大將			お山の大將の様子
10			○	電信柱	つばめ		電信柱の様子
11			○	花火	花火	花火へ問いかけ	花火への思い
12			○	犬・雲		犬への問いかけ	犬と雲の様子
13			○	風		風に対しての対話	風の様子
14			○	たんぽぽ	たんぽぽ		たんぽぽの絨毛の様子
15			○	人形			モリイが泣いている様子
16			○	薔薇			船内の様子

＜分析表についての補足説明＞

表は高野、北原、西條の順に初出年代順に整理番号を付与した表である。

尚、北原と西條は楽譜付きが出現した時期を初出年月としている。

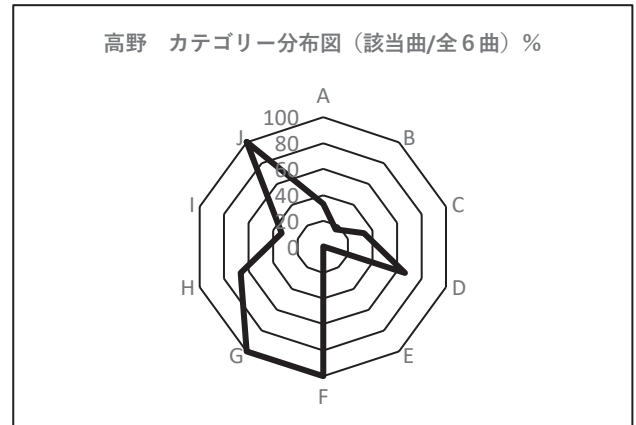


図1 高野辰之 分析カテゴリーの分布傾向のレーダー図（該当曲数/全6曲）

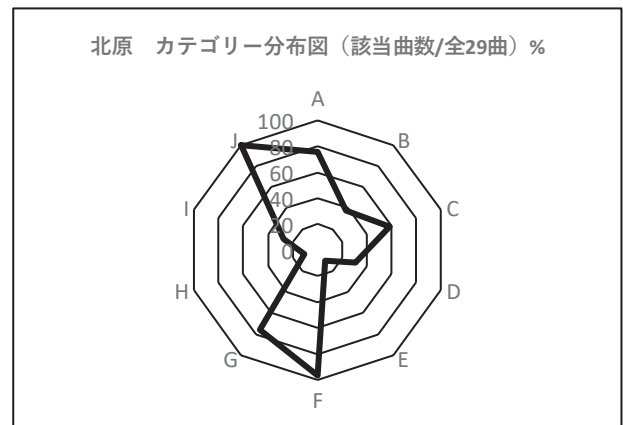


図2 北原白秋 分析カテゴリーの分布傾向のレーダー図（該当曲数/全29曲）

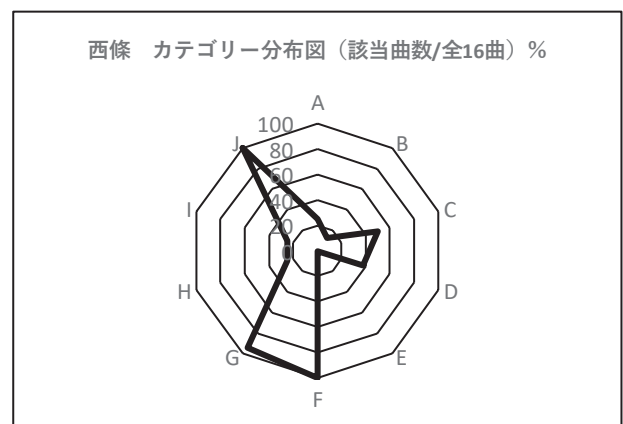


図3 西條八十 分析カテゴリーの分布傾向のレーダー図（該当曲数/全16曲）

8. 分析結果

これらの表により、三者の共通点と相違点が明らかとなった。

三者の共通点としては以下の三点があげられる。

ひとつ目として詩の形態がすべて定型詩である。そして、一部に四四五調はあるものの、ほぼ七五調の定型詩である。

二つ目として何らかの情景や様子をうたっているものである。

三つ目としてキャラクターを持っている。この三点が共通点として明らかである。

また、レーダー図では分析カテゴリーF、G、Jが100%に近い高い数値であり、反面B、C、D、E、H、が低い数値であるため、類似した形状であり、類似の特徴を持っていることも窺える。

次に相違点であるが、次の二点が考えられる。

高野は、花鳥風月をうたっており、言葉による情景の描写がなされている。

北原は、Aのオノマトペが大変多く、Bの同語の繰り返しも多い。また、Cの頭韻による語呂のよいものも多い。Dの脚韻による語呂のよさに該当するものは、多くはないが、言葉の終結部分が分かりやすい。

全体的に言葉で遊んでいるかのようで、言葉のリズム感がある。

西條は、この分析表から相違点となるような特徴を、見つけ出すことはできなかった。

9. 考察

1918年に『赤い鳥』が発行された。

それより先に発行された、1910年、1911年の『尋常小学読本唱歌』『尋常小学唱歌』は、「徳性の涵養」「国民の思想教育」もねらいとしていたものであったがゆえに、当時子どもたちにとって、石田（2008）が言うように「唱歌」と比べると、「童心性」「伝統性」「芸術性」が大変優れている「童謡」

が特異な特徴を出すかとも思われたが、「歌詞のカテゴリーによる分析」では大きな特徴は出現しなかった。

三者とも詩に対する思いが強く、それに付随する音楽に満たされない思いを抱いていたことも同様であった。

9. まとめ

以上の分析の結果及び三者の私観から、当時歌っていた子どもたちにとって、三者の作詞した歌は、差異を感じさせるものではなかったのではないかと考えられる。

現在の音楽科教育では、高野は、歌唱共通教材の作詞者としての地位を獲得し、北原は、童謡詩人としてごく一部の教科書教材の作詞者として知られ、西條作詞の楽曲は、教科書では教材として全く取り扱われないものとなっている。この様に三者は位置付けられ、音楽科教育における位置づけは今後も大きく変化することは考えられにくい。

三者の作詞した歌は、子ども達にとって違いを感じにくいものであったはずでありながら、前述のように音楽科の歌唱共通教材という位置づけによって、その地位を保障される歌「唱歌」と保障されない歌「童謡など」と、隔たれることとなった。

つまり、「唱歌」は学校教育によって歌い継がれ続けたものであり、「童謡など」は歌い継がれ続けることが出来にくいゆえに前述のような位置づけとなった。

これは音楽科教育にとって望ましい歴史であったであろうか。

10. 今後の課題

三者の作品をはじめとする「唱歌」や「童謡」を恒久的な音楽文化遺産ととらえ、今後も歌い継ぐことを念頭に置きながら、それぞれのよさや価値を見出すことは必要なことである。

本論では高野、北原、西條のみを取り上げ、他の詩人の作品は取り上げず、その部分を残した。今後は今回の残した部分の研究を進め、「唱歌」「童謡」という音楽文化遺産を恒久的に継承するためにその追及に努めたいと考える。

引用文献

- 高野辰之(1929).「第二童謡編-童謡と教育-三童謡と唱歌」『民謡・童謡論』春秋社 pp. 171-172
- 高野辰之(1929).「第二童謡編-童謡と教育-五童謡詩に對する私見」『民謡・童謡論』春秋社 p. 179
- 北原白秋(上笙一郎 復刻版編集 1990)「童謡私観」『児童芸術講座 2 童謡編附解説』久山社 p. 2
- 北原白秋(1919).『赤い鳥』
- 西條八十(1934).「現代童謡の外観」『日本文学講座第 9 卷』改造社 p. 375
- 西條八十『赤い鳥』1919 年 9 月

参考文献

- 井口太(1993).「幼児歌唱教材の分析」『東京学芸大学紀要 I 部門教育科学 44』東京学芸大学紀要出版委員会 pp.53-58
- 石田陽子(2008).「童謡は唱歌に代わりえたか?—小学校音楽科教材としての童謡についての一考察—」『四天王寺国際仏教大学紀要第 45 号』四天王寺国際仏教大学紀要編集委員会 pp.273-288
- 渡辺裕(2010). 歌う国民 唱歌、校歌、うたごえ中公新書